

営農ウィークリーNEWS

JA 京都中央京都茄子の2部会に市場より感謝状贈呈



感謝状を受ける西川・三浦両部会長

令和8年2月2日、丹波口にある京都青果センター会議室において、京都市長より長岡京茄子部会と大原野茄子部会に対し感謝状が贈呈されました。これは両部会が、良質なナスを長年計画出荷し市民の食生活の安定と市場取引の向上に寄与したことに対するものです。当日は西川誠司郎長岡京茄子部会長、三浦元貴大原野茄子部会長、京都中央卸売市場第一市場藤本場長、京都青果合同株式会社内田代表取締役社長、京都野菜卸売協同組合西尾理事長、JAより服部経済部長ら各機関組織の関係者ら全20名が参列しました。(京都茄子については裏面参照)



—TAC information—1月降水量は観測史上初の0mm 恵みの雪が

京都市の降水量、平均気温

	降水量(mm)		平均気温(°C)	
	今冬	平年	今冬	平年
11月	27.5	73.5	12.5	13.3
12月	57.5	49.3	8.3	7.6
1月	0	47	4.9	5.3

平年値は過去10年の平均

京都市のアメダスでは、1月の降水量は観測史上初の0mmです。長岡京市も0mmでした。水田や、畑はカラカラに乾いていました。2月8日から9日にかけての雪は降水量で5~10mm程度になっています。恵みの雨ならぬ雪となればいいのですが。

また、アブラナ科葉菜類は、低温遭遇で花芽分化を生じますが、乾燥状態はさらに花芽分化(抽苔)を助長します。生育の遅れているアブラナ科の品目では生育状況を注意して観察してください。





挨拶する藤田市場長



謝辞として産地の歴史と抱負を話す服部経済部長



各部会に贈呈された清水焼のナスの絵の大皿



良品を生み出すV字型仕立て側枝一果取り栽培

京都茄子の歴史

昭和初期には、京都乙訓地域はナスの産地として主に「西院なす」という品種を栽培していましたが、戦中頃には収量の多い「山科なす」に変わりました。戦後は、さらに収量の多い品種が導入され、その後 1961 年に発表されたタキイの品質・収量性に優れた「千両」へと移りました。そして、1964 年に発表された品質良く夏場の収量も安定した「千両 2 号」が広まり現在に至っています。

また、仕立て方法は、1980 年頃から V 字型仕立てが普及し、その後側枝一果取りが定着しました。技術の裏付けや普及では京都府農業総合研究所や農業改良普及所（当時）が中心的な役割を果たしました。さらに、2000 年頃からは、ソルゴー障壁栽培が導入され環境に配慮した栽培を行っています。

JA 京都中央の共販「京都茄子」は、1999 年には 105 戸、栽培面積 11.1ha、出荷量 1,277 t でしたが、2024 年は 40 戸、3.2ha、189 t となっています。

市場からは品質の良さで高く評価されていますが、生産者の高齢化などから生産量が減少しています。産地の維持のためには、今後、より簡易な栽培管理方法の検討などを通じ、作業負担を低減していくことが課題となっています。

（参考資料；京都乙訓農業改良普及センター、JA 京都中央の各資料、「京の野菜記」より）